

朝霧川流域から地域を考える

鈴木遥

新任教員、朝霧川を歩く

2021年10月2日（土）、秋晴れの空のもと、神戸学院大学人文学部の森栗先生、矢嶋先生、学生二名とともに、朝霧川流域を散策した。本年度人文学部に着任した私にとって、有瀬キャンパス周辺を散策する機会は、今回が初めてといっても過言ではなかった。これまで私は東南アジア地域研究を専門とし、インドネシア沿岸の村落における人々の暮らしや自然環境の保全などの問題について研究を進めてきた。インドネシアの村落に住みながら聞き取り調査をし、熱帯林に関わる様々な問題を人々の暮らしから考えてきた。こうした研究を通じて、地域を理解する視点も深めてきた、はずであった。ところが、有瀬キャンパス周辺の地域について理解しようと文献を読み進める中で、私は自分の視野がいかに狭く偏ったものであったかを思い知った。地域を理解する視点を深めてきたなどという自負は一瞬のうちに打ち砕かれ、何をどう理解することがこの地域を理解することなのかさえ分からないという状態に陥った。そもそも大蔵谷とはどこなのか、どの範囲と認識されてきたのか。それさえも分からず、手がかりを探して文献を読む悶々とした日々を送っていた。そんな折に、森栗先生から朝霧川流域を一緒に散策しないかとお声がけをいただいた。

以下は、今回の朝霧川流域散策の報告と、その中で私が考えたことの記録である。私が考えたことには今のところ大きな意味はないが、はじめて朝霧川流域を歩く中で何を感じて何を考えたかということは今しか記録できないことだと思い、記すことにした。

朝霧川流域散策の目的

朝霧川流域散策の目的は、朝霧川流域の歴史や地理に関する動画を作成することであった。作成された動画は、森栗先生が行う、学生と教員が歴史や地理を双方向で学び合う仕組みを開発する研究の中で動画教材の一つとして活用される。動画は学生二名が撮影し、森栗先生と矢嶋先生が朝霧川流域の歴史や地理を解説し、私は質問をしたり、解説を聞く役を担当した。撮影された動画は、歴史や地理の特徴がある場所ごとに短く編集され、オンライン上で公開される予定である。

朝霧川流域散策の内容と考えたこと

私たちは、朝霧川を上流から下流に向かって散策した。スタート地点は有瀬キャンパスの図書館であり、まず大学構内の洪水調整池を訪れた。ここは、大雨が降った際に朝霧川下流で洪水が起こらないように水を貯めておく場所である。有瀬キャンパスが朝霧川上流に位置していることを改めて理解することができた。その後私たちは、有瀬キャンパス南東にあるアラカシやツバキなどの二次林に向かった（写真1）。大蔵谷を含む周辺地域の植生は、この二次林のようなヤブツバキを代表とする常緑広葉樹の植生であるため（生物多様性センター online）、この林は大蔵谷の自然環境、特に森林植生を知る上で手がかりになると、私は考えた。大蔵谷は、奈良期には大倉という地名がみられ（竹内編 1988：285）、地域の範囲は定かではないが、一つのまとまりある地域として認識されていたと考えら

れる。奈良期の朝霧川上流にはどのような森林植生がみられたのだろうか。おそらく今キャンパス内に残る二次林よりももっと深い照葉樹の森が広がり、そこにはシイやカシ、クスノキ、エノキなどの大木が生え、その下にツバキなどの低木が茂っていたと想像される。

二次林を抜けると、有瀬キャンパスの外に出た。そこから少し坂を下ると大蔵谷奥と呼ばれる地域になる。矢嶋先生から、この周辺にはかつてため池があったが埋め立てられたと教えていただいた。その後、私たちは朝霧中学校前にある山の神を訪ねた（写真 2）。山の神は住宅の間にひっそりとあった。飲み物などがお供えされており、地域の方々が山の神を大切にされていることが感じられた。山の神があるということはここが里と山の境なのかと思ひ森栗先生に尋ねると、山の神は地域の色々な事情で移動させたりすることがあり、今ここにあるからと言って単純にそのように理解することはできないと教えていただいた。このようなことをうかがい、私は、この山の神が大蔵谷の歴史の中でどのように移動させられて今日に至っているのかをひも解くことができれば、地域における里と山の境界や土地開拓の歴史などの理解につながる可能性があるかもしれないと考えた。

朝霧川沿いの道を下り、奥山橋に至る途中の曲がり角を西に入ったところに、斜面に森林が残されているところがあった。この斜面は大蔵谷と明舞との境界になっていた。ツバキや

アラカシに混ざってヤマモモやサンゴジュなどの樹木もみられたことから、二次林に色々な樹種が植栽された森林であると考えた。また、森林の手前には花壇なども造られていたことから、この斜面は地域の方々が色々手を加えながら維持されてきたことが想像された。この斜面に二つの石碑があった（写真 3）。これらはため池や土地の整備に関する石碑であり、矢嶋先生から、大蔵谷宿の人々と朝霧川中流から上流の人々の名前が記されていると教えていただいた。ここから私は、低地に暮らしていた人々も朝霧川中流域の農業や土地に関係していたことを知り、流域一帯で生業や土地所有などを捉えることで地域の全体像を理解する視点を持つ必要があることを感じた。



写真1 有瀬キャンパス内の二次林
(2021年10月2日 撮影：木下)



写真2 山の神
(2021年10月2日 撮影：木下)



写真3 石碑
(2021年10月2日 撮影：木下)

階段を上り、斜面の上の道に出た。その南側には朝霧小学校があり、斜面は小学校の構内へと続いていた。矢嶋先生が小学校内に林が残されていることを教えてくださった。外から見た限りでも大きな木が見えた。その後、東へと進み、奥山橋に出た。ここには朝霧川の治水施設である沈砂池や流木止めがあることを矢嶋先生から教えていただいた(写真4)。治水施設余地は、地域の方々が花壇として整備されていた。ここより下流では、朝霧川は水辺



写真4 朝霧川の治水施設
(2021年10月2日 撮影:木下)

空間が楽しめるような川と、雨水を逃がす川との二つに分かれていた。朝霧川では、集中豪雨や台風などにより河口付近で浸水被害が生じ、この治水施設は1991年から2001年にかけて整備された。

その後、私たちは、朝霧川沿いをさらに下流へと歩き、JR・山陽線を越える高架の側歩道で線路をわたり(以前はここに踏切があった)、大蔵地区の地域研究センター明石ハウスに到着し、散策を終えた。

散策を終えて一番に感じたことは、やはり、自分の視野がいかに狭く偏っていたかということであった。地域を理解する一般的な視点や方法などというものはなく、その地域の固有性がどこにあるのか、その地域がどのように形成されてきたのかを、その地域の文脈で理解するということが地域を理解することなのだ実感した。こんな当たり前のようなことがようやく実感として理解できた、そんな感覚であった。朝霧川流域を一度歩いたからと言って何が分かるというわけではないが、しかし、理解が進んだ部分もあった。例えば、文献で読んだことと実際の場所とを一致させたり、文献にはない現場の細かい状況を知ったりすることができた。また、大蔵谷という地域がどのように形成されてきたかについて、南北方向に広がる人々の活動に着目することで新たな側面が理解できるのではないかという感覚を、おぼろげながら掴むことができたことは大きな収穫であった。この感覚を手掛かりに来年度以降さらに現場を歩き、文献を読んで、研究を進めていきたい。

謝辞

本報告は、2021年度神戸学院大学人文学部研究推費(研究課題:「コロナ禍における地域の記憶の継承に向けた実践的研究—地域研究センター明石ハウスを拠点として—」、研究課題:「兵庫県明石市大蔵地区とその周辺における人々による自然資源の利用とその変容」)の助成のもとに実施しました。散策をご一緒させていただいた神戸学院大学人文学部森栗茂一先生、矢嶋巖先生、本文に掲載した写真を撮影、加工してくださった同大学大学院人間文化科学研究科木下巴月さんに御礼申し上げます。

引用文献、サイト

角川日本地名大辞典編纂委員会編(1988)『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』角川書店。

生物多様性センター「第4回自然環境保全基礎調査」(<https://www.biodic.go.jp/reports/4-01/y025.html>) (2022年1月27日アクセス)。